

第八章 アジアの映画を見る理由

三極化する映像文化圏がもたらす悲劇

世界は今、映像文化の上では、ほぼ三つの地域に分割されていると思う。

第一地域は、映画にテレビ番組に、自国の主観的な格好いいイメージを自惚れたつぷりに世界中に大いに売りまくって、もうけているアメリカである。

第二地域は、テレビではともかく、少なくとも映画では、自国の魅力的と思える部分のイメージを自力で世界に紹介できる、ヨーロッパとアジアの若干の国々である。ただし、もうかるどころか政府の補助なしには映画産業の維持もおぼつかないところが大多数である。日本はここに属している。

第三地域は、飢餓や暴動や内戦など、ロクでもないことが起こったときだけ、先進諸

国からテレビ取材班が駆け付けて、容赦なくその客観的にジロジロ観察されたみじめな映像を世界に配達されてしまう大多数の国や地域である。

この映像的な知られ方の違いはあまりにも大きく、そこから生じる相互の認識には非常に大きな格差が生じていることは明らかであり、何事をやるにも全世界がひとつになつて相談しなければならなくなっている今日、それは憂うべきことであると私は思う。

この映像での見せかたの落差のために、人々の抱く世界像は大きく歪んではいないだろうか。いつかアジアフォーカス福岡映画祭でイランの児童映画を上映したとき、フィリピンの映画人たちが、自分たちはイランというとアメリカのニュース映像でしか見たことがなかったから、愛すべきふつうのイラン人たちの出てくる映画を見て本当にびっくりした、と言った。アメリカ発信のテレビのニュースにはイラン人の反米的なこわばった姿だけが写っていて、当たり前前の人情などは省略されているからだ。

アジア各国の手前味噌や自慢話に耳目を向ける

いまや国際化は合言葉であり、日本人はもつと世界を広く深く理解することを求められている。世界を理解するには、自分の眼で世界を見るのがいちばんのようだが、じつ